

## 20 世紀前半の上方落語にみる待遇の助動詞について

村中 淑子

桃山学院大学

tmuranaka@andrew.ac.jp

### Auxiliary Verbs of Politeness/ Impoliteness in Kamigata Rakugo in the First Half of the 20th Century

MURANAKA Toshiko

St. Andrew's University

*Key Words: Osaka Dialect, Comic Stories, Transcript, Downward Treatment, Frequency of Use*

#### 要旨

20 世紀前半（明治・大正・昭和）に口演された上方落語の文字化資料を用いて、待遇の助動詞の使用状況を調べた。その結果、大阪方言における上向き待遇および下向き待遇の助動詞に関しては、1900 年代から 1930 年代にかけてさほど大きな変化がなさそうであり、時代的に一つのまとまりとして扱うことが可能だと考えられた。下向きの待遇の助動詞については、ヤガルとクサルに関わる使用人物の特徴や、サラスとコマスの使用状況について、先行研究の結果を一部検証した。上向きの待遇の助動詞については、テとナスの使用人物の特徴を見た。それらの結果から、待遇の助動詞の使用頻度は、待遇の強さの度合い、および、使用文脈の限定の度合いや、時代の変化と関わりがあると考え、モデル化を試みた。

#### 1 はじめに

村中（2021）は、明治後期から大正にかけての大阪落語 SP レコード文字化資料（真田・金沢 1991）を用いて、罵りの助動詞について考察している。

本稿では真田・金沢（1991）に加えて矢島（2007）を用いることによって資料を増やし、村中（2021）の結果を一部検証し直す。真田・金沢（1991）と矢島（2007）を合わせると明治後期から昭和初期まで、すなわち 20 世紀前半に口演された上方落語文字化資料を用いることになる。

また本稿では、下向き待遇（いわゆる罵り）の助動詞と上向き待遇（いわゆる敬語）の助動詞の使用状況を併せてみることにより、上方方言（大阪方言）における待遇の助動詞全般に関する示唆を得られるのではないかと考えている。

## 2 資料

前述した通り、本稿の資料として、真田・金沢（1991）と矢島（2007）を用いる。

真田・金沢（1991）は、8名の落語家（二代目曾呂利新左衛門、二代目桂文枝、三代目桂文団治、三代目桂文三、初代桂枝雀、二代目林家染丸、四代目笑福亭松鶴、桂文雀）による34演目の落語口演の録音文字化資料である。8名のうち桂文雀のみが明治期・奈良の生まれで、他の7名は江戸期生まれ、大阪育ちとのことである。生まれ年は1844（弘化1）年から1869（明治2）年にわたり<sup>1)</sup>、SPレコード録音・発売年は1903（明治36）年から1926（大正15）年にわたる。

矢島（2007）は、9名の落語家（三代目桂文団治、初代桂ざこば、四代目笑福亭松鶴、三代目桂米團治、初代桂春團治、初代桂文治郎、初代桂春輔、笑福亭圓歌、五代目笑福亭松鶴）による16演目の落語口演の録音文字化資料である。9名とも大阪出身とのことである。生まれ年は1857（安政4）年から1884（明治17）年にわたり、録音・発売年は1920（大正9）年から1938（昭和13）年にわたる。

真田・金沢（1991）と矢島（2007）では、三代目桂文団治<sup>2)</sup>と四代目笑福亭松鶴の2名が重複するが、それぞれの演目は異なっており、口演の重複はない。したがって、合わせて15名の演者による50演目の口演資料となる。

## 3 方法

落語文字化資料に目を通し、上向き待遇の助動詞と下向き待遇の助動詞を数える。

上向き待遇の助動詞としては、ナハル、ナサル、ハル、テ、ナスを数え、下向き待遇の助動詞としては、ヨル、オル、ヤガル、ケツカル、クサル、サラス、コマスを数える。

国立国語研究所『日本語歴史コーパス』の「明治・大正編VI落語 SP盤」には「東京の76作品（落語家13人）、大阪の51作品（落語家10人）<sup>3)</sup>」が収められており、その検索も有効であろうと思われるが、今回は紙資料の矢島（2007）と真田・金沢（1991）を合わせて用いるため、目視調査とする<sup>4)</sup>。上方だけで15名という比較的多くの演者による資料を使うことになり、矢野（1976）の「多数決の原理」を応用できることがメリットとなる<sup>5)</sup>。

## 4 結果

真田・金沢（1991）と矢島（2007）の演目ごとに待遇の助動詞の出現数を示したのが、表1と表2である。いずれも真田・金沢（1991）と矢島（2007）に掲載された演目の順で並べた。すなわち、演者の生まれ年の順であり、同じ演者の演目は録音・発売年の順になっている。

表3では、真田・金沢（1991）と矢島（2007）を合わせて、録音・発売年代の順に並べ変えた。録音・発売年代が同じ場合は、演者の生まれ年の順にした。

表1・2・3とも、左側に下向き待遇の助動詞、右側に上向き待遇の助動詞をまとめた。左から右へ、おおよそ出現の多い項目から少ない項目になるように、かつ表1・2・3とも同じ順で並べた。出現数ゼロのところは×をつけ、網掛けを付した。

表の中では、下向き待遇の助動詞をカタカナ、上向き待遇の助動詞をひらがなで表記した。

【表1】真田・金沢落語資料における関西方言・待遇助動詞の出現数

演者と生年	演目	ヨル	オル	ヤガル	ケツカル	クサル	サラス	コマス	なはる	なさる	はる	て	なす
二代目曾呂利新左衛門/1844	馬部屋	5	1	×	×	×	×	×	1	×	×	×	×
二代目曾呂利新左衛門	盲の提灯	×	×	3	×	×	×	×	×	2	×	×	×
二代目曾呂利新左衛門	後へ心がつかぬ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
二代目曾呂利新左衛門	鋌盗人	4	1	1	×	×	×	×	1	1	×	×	×
二代目曾呂利新左衛門	恵比須小判	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	2	×
二代目曾呂利新左衛門	日と月の下界旅行	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
二代目曾呂利新左衛門	動物博覧会	2	×	×	×	×	×	×	×	×	×	1	×
二代目曾呂利新左衛門	絵手紙	×	×	×	×	×	×	×	1	×	×	1	×
二代目桂文枝/1844	近江八景	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
二代目桂文枝	小噺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
二代目桂文枝	たん医者	×	×	×	×	×	×	×	×	2	×	×	×
二代目桂文枝	近日息子	×	×	×	×	1	×	×	×	6	1	×	×
三代目桂文団治/1856	儉約の極意	×	×	×	×	×	×	×	3	1	×	×	×
三代目桂文団治	芝居の小噺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
三代目桂文三/1859	天神咄	×	×	×	×	×	×	×	×	2	×	×	1
三代目桂文三	魚売り	×	×	×	×	×	×	×	5	×	×	×	×
初代桂枝雀/1864	亀屋佐兵衛	×	×	×	×	×	×	×	4	3	×	1	×
初代桂枝雀	蛸の手	8	1	10	×	1	×	×	×	×	×	×	×
初代桂枝雀	きらいきらい坊主	×	×	×	×	×	×	×	2	1	1	×	1
初代桂枝雀	煙管返し	×	×	×	×	×	×	×	13	×	×	×	×
初代桂枝雀	いびき車	1	×	×	×	×	×	×	1	1	×	×	×
初代桂枝雀	芋の地獄	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
初代桂枝雀	さとり坊主	5	1	4	×	×	×	×	12	6	×	×	×
二代目林家染丸/1867	日和違い	×	1	2	5	×	×	×	4	×	3	×	×
二代目林家染丸	電話の散財	4	×	1	×	×	×	×	6	1	8	×	×
四代目笑福亭松鶴/1869	一枚起請	2	×	2	1	×	×	×	2	2	×	×	1
四代目笑福亭松鶴	いらちの愛宕参り	2	×	3	×	×	×	×	5	×	×	1	3
四代目笑福亭松鶴	魚尽し	1	×	×	×	×	×	×	×	×	2	×	×
四代目笑福亭松鶴	筍手打	×	×	1	×	×	×	×	×	×	×	×	×
四代目笑福亭松鶴	平の蔭	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
四代目笑福亭松鶴	理屈あんま	7	×	2	1	1	×	×	3	1	×	×	×
四代目笑福亭松鶴	やいと丁稚	1	×	1	×	1	×	×	8	4	×	×	1
四代目笑福亭松鶴	浮世床	4	×	×	×	×	×	×	7	6	×	×	×
桂文雀/1869	長屋議会	1	×	×	×	×	×	×	9	2	10	1	×
計		47	5	30	7	4	0	0	87	41	25	7	7

【表2】 矢島落語資料における関西方言・待遇助動詞の出現数

演者と生年	演目	ヨル	オル	ヤガル	ケツカル	クサル	サラス	コマス	なはる	なさる	はる	て	なす
三代目桂文團治/1857	四百ぶらり	4	×	×	1	×	×	×	1	×	×	×	×
初代桂ざこば/1867	大和橋	×	×	×	×	×	×	×	1	×	×	×	×
初代桂ざこば	脱線車掌	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	1	×
四代目笑福亭松鶴/1839	天王寺詣り	5	1	×	×	×	×	×	11	×	×	×	×
三代目桂米團治/1870	ぬの字鼠	1	1	×	×	×	×	×	7	1	×	×	2
三代目桂米團治	大安売	1	×	×	×	×	×	×	6	×	3	×	11
初代桂春團治/1878	古手買い	3	1	3	2	×	×	×	14	1	2	×	×
初代桂春團治	阿弥陀池	15	1	4	3	×	×	×	7	3	3	×	×
初代桂春團治	寄合酒	8	×	3	3	1	×	×	1	×	5	×	×
初代桂春團治	いかけや	13	1	17	6	3	×	1	7	×	2	×	×
初代桂文治郎/1878	親子茶屋	3	1	×	2	×	×	×	11	7	1	×	×
初代桂春輔/1881	十七倉	3	×	×	×	×	×	×	1	×	×	×	×
笑福亭圓歌/1882	ひやかし	3	1	6	1	×	1	*1	4	×	1	×	×
五代目笑福亭松鶴/1884	くしゃみ講釈	1	×	×	×	×	×	×	6	×	2	×	×
五代目笑福亭松鶴	船弁慶	12	×	2	×	×	×	×	8	×	6	×	×
五代目笑福亭松鶴	天王寺詣り	10	×	×	×	×	×	×	22	1	×	×	×
計		82	7	35	18	4	1	2	107	13	25	1	13

\*をつけた「コマス」は、文字化部分は「クテカマシタッテン（食てかましたってん）」であるが「コマス」が音声変化してカマスになったものとみなし、コマスに含めた。

【表3】 真田・金沢落語資料および矢島落語資料における関西方言・待遇助動詞の出現数(録音・発売年順)

演者	演者 生年	録音 ・ 発売 年	演目	ヨ ル	オ ル	ヤ ガ ル	ケ ツ カ ル	ク サ ル	サ ラ ス	コ マ ス	な は る	な さ る	は る	て	な す
二代目曾呂利新左衛門	1844	1903	馬部屋	5	1	×	×	×	×	×	1	×	×	×	×
二代目曾呂利新左衛門	1844	1903	盲の提灯	×	×	3	×	×	×	×	×	2	×	×	×
三代目桂文三	1859	1903	天神咄	×	×	×	×	×	×	×	×	2	×	×	1
三代目桂文三	1859	1903	魚売り	×	×	×	×	×	×	×	5	×	×	×	×
初代桂枝雀	1864	1903	亀屋佐兵衛	×	×	×	×	×	×	×	4	3	×	1	×
初代桂枝雀	1864	1903	蛸の手	8	1	10	×	1	×	×	×	×	×	×	×
初代桂枝雀	1864	1903	きらいきらい坊主	×	×	×	×	×	×	×	2	1	1	×	1
初代桂枝雀	1864	1903	煙管返し	×	×	×	×	×	×	×	13	×	×	×	×
二代目曾呂利新左衛門	1844	1907	後へ心がつかぬ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
四代目笑福亭松鶴	1869	1907	一枚起請	2	×	2	1	×	×	×	2	2	×	×	1
四代目笑福亭松鶴	1869	1907	いらちの愛宕参り	2	×	3	×	×	×	×	5	×	×	1	3
四代目笑福亭松鶴	1869	1907	魚尽し	1	×	×	×	×	×	×	×	×	2	×	×
四代目笑福亭松鶴	1869	1907	箭手打	×	×	1	×	×	×	×	×	×	×	×	×
四代目笑福亭松鶴	1869	1907	平の蔭	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
初代桂枝雀	1864	1909	いびき車	1	×	×	×	×	×	×	1	1	×	×	×
初代桂枝雀	1864	1909	芋の地獄	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
二代目曾呂利新左衛門	1844	1911	日と月の下界旅行	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
二代目曾呂利新左衛門	1844	1911	動物博覧会	2	×	×	×	×	×	×	×	×	×	1	×
二代目曾呂利新左衛門	1844	1911	絵手紙	×	×	×	×	×	×	×	1	×	×	1	×
二代目桂文枝	1844	1911	近江八景	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
二代目桂文枝	1844	1911	小噺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
二代目桂文枝	1844	1911	たん医者	×	×	×	×	×	×	×	×	2	×	×	×
二代目桂文枝	1844	1911	近日息子	×	×	×	×	1	×	×	×	6	1	×	×
二代目曾呂利新左衛門	1844	1912	鋌盗人	4	1	1	×	×	×	×	1	1	×	×	×
二代目曾呂利新左衛門	1844	1912	恵比須小判	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	2	×
三代目桂文団治	1856	1912	儉約の極意	×	×	×	×	×	×	×	3	1	×	×	×
三代目桂文団治	1856	1912	芝居の小噺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
初代桂ざこば	1867	1920	大和橋	×	×	×	×	×	×	×	1	×	×	×	×
初代桂枝雀	1864	1923	さとり坊主	5	1	4	×	×	×	×	12	6	×	×	×
二代目林家染丸	1867	1923	日和違ひ	×	1	2	5	×	×	×	4	×	3	×	×
二代目林家染丸	1867	1923	電話の散財	4	×	1	×	×	×	×	6	1	8	×	×
桂文雀	1869	1923	長屋議会	1	×	×	×	×	×	×	9	2	10	1	×
初代桂春輔	1881	1923	十七倉	3	×	×	×	×	×	×	1	×	×	×	×
笑福亭圓歌	1882	1923	ひやかし	3	1	6	1	×	1	*1	4	×	1	×	×
四代目笑福亭松鶴	1869	1924	理屈あんま	7	×	2	1	1	×	×	3	1	×	×	×
三代目桂文団治	1870	1924	ぬの字鼠	1	1	×	×	×	×	×	7	1	×	×	2
三代目桂文団治	1857	1925	四百ぶらり	4	×	×	1	×	×	×	1	×	×	×	×
四代目笑福亭松鶴	1869	1925	やいと丁稚	1	×	1	×	1	×	×	8	4	×	×	1
四代目笑福亭松鶴	1869	1925	天王寺詣り	5	1	×	×	×	×	×	11	×	×	×	×
四代目笑福亭松鶴	1869	1926	浮世末	4	×	×	×	×	×	×	7	6	×	×	×
初代桂文治郎	1878	1926	親子茶屋	3	1	×	2	×	×	×	11	7	1	×	×
初代桂ざこば	1867	1927	脱線車掌	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	1	×
初代桂春團治	1878	1929	古手買い	3	1	3	2	×	×	×	14	1	2	×	×
三代目桂文団治	1870	1930	大安売	1	×	×	×	×	×	×	6	×	3	×	11
初代桂春團治	1878	1930	阿弥陀池	15	1	4	3	×	×	×	7	3	3	×	×
初代桂春團治	1878	1933	寄合酒	8	×	3	3	1	×	×	1	×	5	×	×

初代桂春團治	1878	1934	いかけや	13	1	17	6	3	×	1	7	×	2	×	×
五代目笑福亭松鶴	1884	1935	くしゃみ講釈	1	×	×	×	×	×	×	6	×	2	×	×
五代目笑福亭松鶴	1884	1935	船弁慶	12	×	2	×	×	×	×	8	×	6	×	×
五代目笑福亭松鶴	1884	1938	天王寺詣り	10	×	×	×	×	×	×	22	1	×	×	×
計				129	12	65	25	8	1	2	194	54	50	8	20

## 5 考察

### 5.1 1900年代から1930年代の口演全体について

演者ごとに生まれ年順に並べた表1を見ると、1850年代以前に生まれた演者は1860年代以降に生まれた演者に比べて下向き待遇の助動詞の出現が少なく、時代が進むに従って下向き待遇の助動詞の出現が増えたようにも見える。しかし、録音・発表年順で統一して並べ変えた表3で全体を見ると、時代差はさほど大きい訳ではない。

表3において、録音・発売年の1900年代、1910年代、1920年代、1930年代、の年代ごとに待遇助動詞の出現を観察すると、出現数の希少なコマス・サラスを除けば、1900年代から全て出現していて、その後の年代においても、数の多少はあるものの出現が続いている。したがって、少なくとも上方落語の世界では、そしておそらく落語以外の日常世界においてもそれに近い状況だったかと推測されるが、1900年代から1930年代までずっと、下向き待遇のヨル・オル、ヤガル、ケツカル、クサル、および、上向き待遇のナハル、ナサル、ハル、テ、ナスが存在し続けていた。少なくとも約40年の間、下向き待遇・上向き待遇の助動詞に関しては時代の変化は少なく、複数の助動詞が存在し、それぞれ使われていたとみてよいだろう。

### 5.2 待遇の助動詞の出現頻度について

前節で見たとおり、下向き待遇・上向き待遇の複数の助動詞の存在については、1900年代から1930年代にかけて、大きな変化がないようである。

では、約40年間における、それぞれの助動詞の出現頻度は何を意味するだろうか。次の表4は、全50演目において当該助動詞が出現した演目数と割合を示したものである。表5は、全15名の演者のうち当該助動詞を使用した演者数と割合を示したものである。

【表4】 待遇の助動詞が出現した演目の数

	ヨル	オル	ヤガル	ケツカル	クサル	サラス	コマス	なはる	なさる	はる	て	なす
出現した演目の数	28	12	17	10	6	1	2	33	21	15	7	7
50演目中の割合	0.56	0.24	0.34	0.2	0.12	0.02	0.04	0.66	0.42	0.3	0.14	0.14

【表 5】 待遇の助動詞を使った演者の数

	ヨル	オル	ヤガル	ケツカル	クサル	サラス	コマス	なはる	なざる	はる	て	なす
使用した演者の数	11	7	7	5	4	1	2	14	12	10	5	4
15名中の割合	0.73	0.47	0.47	0.33	0.27	0.07	0.13	0.93	0.8	0.67	0.33	0.27

表 4 と表 5 において、数値の大小の傾向は極めて類似している。使われる演目の多い助動詞は、使う演者が多い助動詞である。下向き待遇の助動詞は、ヨル・オル<sup>6</sup>、ヤガル、ケツカル、クサル、コマス、サラス、の順に多い。上向き待遇の助動詞は、ナハル、ナサル、ハル、テ、ナスの順に多い。

また、表 4 と表 5 において「割合」を比べると、どの語項目も表 5 の方が高い数値を示す。つまり、使用する人の割合が、使用される演目の割合よりも多い。すなわち待遇の助動詞は、演目によって使われたり使われなかったりするが、ある演者が、たまたまその演目ではその待遇の助動詞を使わなかったとしても、他の演目では使っていることはよくある、といえそうである。

ここで、考察のための仮説として、ルール A を設定する。

ルール A：待遇の度合いの強さは、出現頻度と反比例する。

これは、下向き待遇の助動詞には、概ねそのまま当てはまりそうである。下向き待遇の度合いの比較的弱いもの、すなわち、程度の軽い罵りの意味を持つヨル・オルは頻繁に使われやすく、やや重めの罵りの意味を持つヤガル、ケツカル、クサルは使われにくい、と言ってもよさそう。これは、人々の通常の談話において、軽めの罵りは気軽に行いやすい行動なので現れやすいが、重めの罵りという行動は、普段気軽に行うには抵抗感があり、やや思い切った行動であるため、あまり頻度高く表れるものではない、ということなのであろう。下向き待遇の助動詞のうち、出現数の希少なコマス・サラスについては、5.4 で述べる。

一方、上向き待遇の助動詞には、ルール A は必ずしも当てはまっていない。上向き待遇の助動詞は、ナサル>ナハル>ハルの順に、音声的にくだけていくことになるので、丁寧さ・待遇の高さはこの順に低くなると考えられる。ここにルール A を当てはめると、出現頻度はハル>ナハル>ナサルになるはずである。しかし実際の出現頻度はナハル>ナサル>ハルであった。すなわち、ハルが少ない、という点で、ルール A が当てはまらない。

この理由として考えられるのは、ハルの使用が 1900 年代以前の近い時期に始まったところであり（江戸期のハル使用は発見されていない）、まだ使用が十分に熟していなかったからではないか、ということである。逆に言えば、ハルが 20 世紀前半においてすでに長く使われていて

熟した語形であったならば、ルール A が当てはまったのではないかと考える。上向き待遇の助動詞のうち、比較的出現数の少ないテとナスについては、5.5で見る。

### 5.3 ヤガルとクサルについて

村中 (2021) において、「クサルとヤガルの使用者が相補的」という傾向が見られ、「クサルは重みのある年配男性、ヤガルは若者あるいは軽劇な男性が使う」と考えられた。今回、矢島 (2007) を資料として増やしたことで、この結論が変わらないかどうかを見てみよう。

真田・金沢 (1991) ではクサルは4件、ヤガルは30件、矢島 (2007) ではクサルは4件、ヤガルは35件であった。

以下、用例の後ろの括弧内は、(演者名「演目名」：話者→聞き手、待遇の対象)である。ただし、演者名は同定が可能な程度に短く略した形にした。聞き手と待遇の対象が同一の場合は、「話者→聞き手」とし、待遇の対象に下線を付すこととする。

矢島 (2007) におけるクサルの4件は次の通りである。

- (1) 泣かいてもええがな また泣いてくさんねやがな。  
(初代春團治「寄合酒」：兄貴→若者)
- (2) おれを人間と思とらんねん 豚みたいに思てくさんねや。  
(初代春團治「いかげや」：いかげ屋→こども)
- (3) 馬みたいに言うてくさんねん。  
(初代春團治「いかげや」：いかげ屋→こども)
- (4) その縄グーグー引っ張ってくさんねん お前ら。  
(初代春團治「いかげや」：いかげ屋→こども)

(1)の話し手は「兄貴」である。「重みのある年配男性」とまでは言えない。ただ、この演目の中では、若者連中が集まって、この兄貴のところに酒を飲みに行くという設定であり、他の人物に比べればやや年かきで、年長者らしく振る舞っている様子が見られる。

(2)(3)(4)は同じ文脈で、いかげ屋が自分をからかった近所のこどもに対して発するセリフである。(2)(3)(4)ともに、話し相手の「こども」の動作につく助動詞としてクサルが使われている。しかし直接にあしざまに罵っているというよりは、小さいこどもにこんなひどいことをされた、という描写を誰かに向かっておこなっているような、やや突き放したニュアンスである。描写して見せるようなニュアンスは、(1)も同様である。面罵の感じではなく、対等に攻撃するような罵りでもない。

いずれにしても、クサルは、その場面における年長者が年長者として振る舞う中で出てくる助動詞であるとは言えそうである。

一方、ヤガルはどうであろうか。矢島 (2007) におけるヤガルの用例35件のうち、最も多くを占めたのが、初代春團治の「いかげや」の17件である。話し手を見ると、いかげ屋、こども、



うなぎ屋、である。すなわち主だった登場人物は全員、複数回使っているのである。同じく春團治の「古手買い」では、番頭と、買い物に来た男が使う。「阿弥陀池」では、隠居、喜六、とら、すなわち、かしこい役柄、間抜けな役柄、間抜け役の相手をする役柄、の皆が使っている。「寄合酒」では、兄貴と若者の両方が使う。圓歌の「ひやかし」では遊郭の客の1人が盛んに使い、五代目松鶴の「船弁慶」では松と喜六が使う。

以上のように、ヤガルは、矢島 (2007) の資料においては、人物を問わず使われる語形のようなものである。クサルの使用者である「いかげ屋」と「兄貴」がヤガルも使用しており、相補的ではない。若者あるいは軽劇な男性が使うとは限らないようだ。年長者の用例を挙げておこう。

(5) 尼はんの胸板いたいて筒先をこう向けやがったん。<sup>7)</sup>

(初代春團治「阿弥陀池」：隠居→喜六、泥棒)

(6) 割りやがって、言い訳立たんもんやさかい、ほなあんじょう抜かしやがれんねん。

(初代春團治「寄合酒」：兄貴→若者)

以上のことから、村中 (2021) における結論のうち「クサルは重みのある年配男性が使う」というのは本稿においてもある程度当てはまるが、年配男性とまでは限定できず、「クサルは年長者がそれらしく振る舞う中で出現する」と言い換えることができそうであった。一方、ヤガルは「若者あるいは軽劇な男性が使う」とは言いきれず、年代や人物を問わず誰でも使う語形のようにあり、「クサルとヤガルの使用者が相補的であるという傾向」は見出しにくかった。

ただ、矢島 (2007) におけるヤガルの用例 35 件のうち、27 件までが初代春團治の演目中出现するものであり、残りの圓歌 (6 件) と五代目松鶴 (2 件) が資料の中で最も若い演者であることに注目すると、ヤガルに関しては、真田・金沢 (1991) と矢島 (2007) の資料の間に質的な違いがあるのかもしれない。金沢裕之は真田・金沢 (1991) の「はじめに」の中で落語・寄席研究家の正岡容の記述を引用し<sup>8)</sup>、「初代春團治のことばは、言語研究の立場からするとかなりの留保を付けた上で扱う必要がありそうだ」と述べて、真田・金沢 (1991) の資料の中に初代春團治を入れず、その前の世代の落語家の口演に限定していた。初代春團治のことばは癖の強いものだった可能性があるが、圓歌の「ひやかし」の例と五代目松鶴の「船弁慶」の例から見ると、ヤガルが「若者あるいは軽劇な男性が使う」ものから誰でも用いるものへと、時代による変化が生じた可能性もある。

#### 5.4 サラスとコマスについて

村中 (2021) で用いた資料の真田・金沢 (1991) において、サラスは、本動詞としては出現したが、助動詞としては出現しなかった。今回、矢島 (2007) を資料として増やしたところ、待遇の助動詞としてのサラスの使用が1件だけ出現した。次の(7)である。

(7) ええおなごばかり、抱いて寝さらして。

(圓歌「ひやかし」：客→他の客)

遊郭に客として来た男が、自分にあてがわれた遊女について不満タラタラで、もう1人の男の客を羨ましがりながら罵る場面である。1例しかないため、一般化はできないのであるが、かなり強い腹立ちの感情と共に使われる助動詞のようである。

また、村中(2021)においてコマスは調べていなかったが、今回調べたところ、真田・金沢(1991)にはゼロであり、矢島(2007)には2件出現した。1つは次の(8)である。

(8) 腹減ってたもんやから、むしゃむしゃと 食てかましたってん。

(圓歌「ひやかし」：客→他の客, 遊女)<sup>9</sup>

これは上記のサラスの用例(7)のすぐ後の場面に出てくるもので、羨ましがられた方の男が、自分にあてがわれた遊女もひどいものであったと愚痴るところである。その遊女の枕元に落ちていた団子のようなものを食べてやったのだ、ザマアミロ、というようなニュアンスのセリフである。文字化はカマシタとなっているが、使用文脈から考えて、コマシタの音声的訛りであろう。もう1つは次の(9)である。

(9) ヤケドすんならヤケドさしてみたれ。しょんべんで火、消してこましたら。

(初代春團治「いかげや」：こども→いかげ屋)

「いかげや」は、いかげ屋と近所のこどもの言い合いが続く演目である。いかげ屋が商売で鍋や釜を直すために火を使っており、こどもに向かって、近づくとヤケドする、と注意をしたところ、気の強いこどもが上記のように言い返す。「火、消してこましたら」というのは、火を消すことによって相手に被害を与えてやる、という強い罵りのニュアンスのあるセリフである。「こましたら」の「たら」は仮定のタラではなく、「～てやらあ(～てやるぞ)」が音声的に訛って「たら」になったものである。

下向き待遇の助動詞としてのサラスおよびコマスは、真田・金沢(1991)では使われていなかったが、矢島(2007)では上記のように、特異なキャラクターや特異な場面ではない、市井の普通の人物による自然でありふれた会話の場面で使われていた。使用頻度は低い、日常に存在していた証拠となる、と見てよいだろう。いずれも、ことばの上では、罵りの程度はかなり強めのものである。出現頻度が低い理由の一つとしては、その罵りの程度の強さが考えられる。

## 5.5 テとナスについて

テ(いわゆるテ敬語)は、二代目曾呂利新左衛門、初代桂枝雀、四代目笑福亭松鶴、桂文雀、初代桂ごこばによって使われており、計8件である。それぞれ、1演目に1回か2回出現する。使用している話し手を見ると、「恵比寿小判」の毘沙門天、「動物博覧会」の隠居、「絵手紙」

の清さん、「亀屋佐兵衛」の聴衆、「いらちの愛宕参り」の作の奥さん、「長屋議会」のお婆さん、「脱線車掌」の遊女である。使用者は、穏やかな大人の人物あるいは女性にやや傾く傾向があるようだが、さほど丁寧度が高いわけでもない。例を挙げる。

(10) お前毎日わしのうちへ福くれえちゅうて来てくれてやけども、お前に福上げるくらいなわしとこはこないな大けな賽銭箱出しておかんちゅうん。

(二代目曾呂利「恵比寿小判」：毘沙門さん→源さん)<sup>10</sup>

(11) ブラブラと歩いててやったら、月に五十円の月給がもらえる。

(二代目曾呂利「動物博覧会」隠居→留さん)

(12) お参りしいか。いつ参ってや。

(四代目松鶴「いらちの愛宕参り」：奥さん→作(夫))

毘沙門天から見た源さん、隠居から見た留さんは、さほど高く待遇すべき人物とは思えないし、前後のセリフを見ても、丁寧な感じではない。奥さんから夫の作に対しても同様である。待遇のテの響きは柔らかいものなのだろうが、目上ではない親しみのある相手に対するものであり、丁寧度は低めのようなのである。

ナスは、三代目桂文三、初代桂枝雀、四代目笑福亭松鶴、三代目桂米團治、によって使われており、計 20 件である。およそ 1 演目に 1~3 回出現するのだが、三代目桂米團治の「大安売」だけが例外的に多く、11 回も出現している。

「大安売」は、相撲取りと、相撲取りをおだてて面白がろうとする男たちとの会話から成り立っており、男 1 と男 2 が相撲取りに向かって盛んにナスを使う。次のようである。

(13) しばらく見まへなんだが、どこぞ行てなしたかい。

(二代目米團治「大安売」：男 1→関取)

(14) あれだけの大けえ相撲取りになりなしたんじゃが、えらいもんじゃちゅう。あんたかて、そん中にあるや、心配せんでもよろしい。

(二代目米團治「大安売」：男 1→関取、他の関取)

(15) 立ち上がりはどうしなした。(略) かましなしたか。

(二代目米團治「大安売」：男 1→関取)

この男は関取に対して、ナスだけでなくナハルも用いており、やや距離のある関係であるのは見てとれる。ナスの、他の例の話し手・相手・待遇対象を見ると、次のようであった。

(16) な無茶したらどうもならんが。お賽銭にあげなしたんや。

(三代目文三「天神咄」：男(かしこい役回り)→男(間抜けな役柄)、賽銭を上げた第三者)

- (17) えらいアバズレな和尚. 勝手元へつかつかつとおいでなして,  
 (初代枝雀「きらいきらい坊主」: 語り手→聴衆, 和尚)
- (18) それまでの証拠と, 身につけてなざる衣を取って渡してやりなした.  
 (四代目松鶴「一枚起請」: 伯父→甥, 中国の人物)
- (19) どうしなしたんや.  
 (四代目松鶴「いらちの愛宕参り」: 参詣人→(通りすがりの) 作さん)
- (20) 旦那様も置きなさりやええのに, こどもがためにおかしい言い上がりんなってきて, 火をつけなしたん.  
 (四代目松鶴「やいと丁稚」: 語り手→聴衆, 旦那)

これらを見ると, ナスは, 通りすがりのよそよそしい関係の相手 (用例 19) や第三者 (用例 16) の動作に使ったり, あるいは, 語り手が話の中の人物の動作を描写する際に使ったり (用例 17, 18, 20) しているようである.

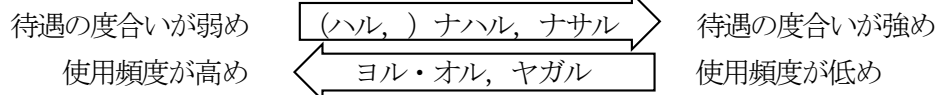
## 6 待遇の助動詞の出現頻度に関するまとめ

以上みてきた通り, 上方方言 (大阪方言) においては, 上向き待遇においても, 下向き待遇においても, 複数の助動詞が存在する. 同様の働きの語が複数存在するということは, 何らかの棲み分けがあると考えられるが, それはどのようなものなのだろうか.

複数の待遇の助動詞には, 「出現頻度」「待遇の強さの度合い」「使用文脈の限定の度合い」「時代的変化」に関して, 違いが見られる. 今回のデータにおける出現数の合計で 50 を境と仮定し, 出現頻度を高低の2つに分けて, 次のように考えた.

### 出現頻度の高い助動詞

よく使われる言葉. 汎用性が高い. 文脈や使用者は様々である.  
 上向き待遇では, ナサル, ナハル, ハル. 下向き待遇では, ヨル・オル, ヤガル.  
 このカテゴリの中では, 使用頻度の高さと待遇の強さが反比例する.



### 出現頻度の低い助動詞

汎用性が不高くない. 何らかの点で特殊である. 例えば次の①②③.

- ① 特定の限定的な文脈で使われる.  
 →クサル (年長者らしさ). ナス (語り手らしさ, よそよそしさ.)
- ② 待遇の度合いがかなり強い. →ケツカル・サラス・コマス.
- ③ 時代の流れですたれる方向に進みつつある. →テ, ナス.

大きく2つのカテゴリに分けたが、出現頻度の高いカテゴリの中でも、待遇の度合いが強いものは、使用頻度が比較的低いものである。時代が進めば、さらに出現頻度が減り、出現頻度の低い方のカテゴリに含まれるようになることもあろう。例えば、ナサルは現在の大阪方言では出現頻度の低い方のカテゴリに含まれ、①に該当するのではないかと考えられる。

また、上記のナスがそうであるように、①②③の要素は、重なりうるものである。

## 7 おわりに

以上、本稿では真田・金沢 (1991) および矢島 (2007) の資料、すなわち 20 世紀前半に口演された上方落語文字化資料から、上方方言 (大阪方言) における下向き待遇 (いわゆる罵り) の助動詞と上向き待遇 (いわゆる敬語) の助動詞の使用状況をみた。

その結果、大阪方言における上向き待遇および下向き待遇の助動詞に関しては、1900年代から1930年代にかけてさほど大きな変化がなさそうであり、時代的に一つのまとまりとして扱うことが可能だと考えられた。

下向きの待遇の助動詞については、ヤガルとクサルに関する使用者の特徴と、サラスとコマスの使用状況について、村中 (2021) の結果を検証し直した。村中 (2021) では「クサルとヤガルの使用者が相補的」「クサルは重みのある年配男性、ヤガルは若者あるいは軽烈な男性が使う」と考えられたのだが、今回の結果から見ると、クサルは年長者らしさと結びついていて、ヤガルは比較的誰でも使う語形のようにあり、相補的とは言いにくいようであった。村中 (2021) に出現しなかったサラス・コマスは、今回の結果でわずかに出現し、いずれもありふれた普通の人物が用いていたが、罵りの程度は強めであった。

上向きの待遇の助動詞については、テとナスの使用者と使用文脈の特徴を見た。それらをもとに、待遇の助動詞の出現頻度に関して、モデル化に向けての考察を行った。待遇の助動詞を出現頻度で2つのグループに分け、出現頻度が高いグループの中で使用頻度と待遇の度合いの強さが反比例すること、および、出現頻度の低いグループの中でその理由が3つ考えられることを述べた。

今後も引き続き、待遇の助動詞について、扱う時代や資料を増やして、より妥当な結論に至るよう調べを進めていきたい。

### 【注】

<sup>1)</sup> 表1・表2・表3を作成するにあたり、演者の生まれ年は、真田・金沢 (1991) と矢島 (2007) の記載にそれぞれ従った。ただし、真田・金沢 (1991) で生年不明とされている桂文雀については、ウィキペディアの記述に従って1869年とした。

<sup>2)</sup> 三代目桂文団治の生まれ年が、真田・金沢 (1991) では1856年、矢島 (2007) では1857年となっていて1年ずれているが、作表にあたってはそのままにしておく。

- 
- <sup>3)</sup> 『日本語歴史コーパス』の「明治・大正編VI落語 SP 盤」の「大阪の 51 作品（落語家 10 人）」には、真田・金沢（1991）の収録作品が含まれている。
- <sup>4)</sup> ゆえに、数え間違いの可能性は残る。
- <sup>5)</sup> 矢野（1976）では「多数決の原理」として「多種の洒落本にわたって一般的に認められ多数の用例を持つ現象の方が、特殊な場面に認められる少数の現象よりは、口頭語を反映している可能性が大きい」という考え方を述べている。これは洒落本以外にも応用できる考え方であろう。例えば、より多くの落語家にわたって用例を持つ現象は、同時代の口頭語を反映している可能性が大きいと言えるだろう。
- <sup>6)</sup> ここではヤルとオルがほぼ同じものであるとして、まとめて扱う。
- <sup>7)</sup> 「胸板いたいて」は「胸板に対して」の意味。「向けやがったん」は「向けやがったのだ」の意味である。
- <sup>8)</sup> 正岡容（1976）の「大阪弁へ、酸を、胡椒を、醤油を、味の素を、砂糖を、蜜を、味醂を、葛粉を、時としてサッカリンを、クミチンキを、大胆奔放に投込んで、気随気儘の大阪弁の卓袱料理を創造した崎才縦横の料理人こそ、先代桂春團治であると云へよう」という記述を、金沢は引用している。つまり初代春團治の落語における大阪弁は、濃く味付けした大げさな大阪弁であったろうということのようだ。ただ、同じ正岡（1976）が「上方には独自の陰影を有つ市井語が現代近くまで遺ってゐたから、此を自由に使駆し得た上方落語は…」と述べており、初代春團治の特徴として、オノマトペ・感動詞の発音のしかたとそれに結びついた声の特色（「どぎつい」印象のある太い声）や、身振り手振り、姿かたちなどを挙げていることから、初代春團治の落語の個性は音声的特徴や非言語行動に強く現れていたとも取れるので、語形だけを取り上げれば、市井の人々が使う通常の大阪方言の性質とさほど大きくは変わらなかった可能性もあるのではないか。なお、正岡（1976）は正岡容（1904-1958）の没後に編集されたものであり、上記の記述の初出は不明である。
- <sup>9)</sup> ここで扱った他の下向きの助動詞は、低く待遇する対象の動作につくものであるが、コマスの場合は、自分の動作につく助動詞である。その自分の動作を向ける相手（自分の動作によって被害を与えようとする相手）を、「待遇の対象」の形で示すこととする。
- <sup>10)</sup> このセリフは、毘沙門天が自分にこのように言った、ということを源さんが隠居に伝えている場面のセリフである。すなわちその場でこのセリフを発しているのは、源さんなのであるが、前後の文脈からすると、実際の会話をそのままリアルに再現したものであると思われるので、この演目では毘沙門天のセリフとして発せられたとみなすことにする。

#### 【参考文献】

真田信治・金沢裕之、1991、『二十世紀初頭大阪口語の実態——落語 SP レコードを資料として』（平成二年度文部省科学研究費補助金一般研究 (B) 課題番号 01450061 「幕末以降の大阪口語変遷の研究」研究報告書）。

- 正岡容, 1976, 『正岡容集覧』 仮面社.
- 村中淑子, 2020, 『関西方言における待遇表現の諸相』 和泉書院.
- 村中淑子, 2021, 「明治・大正期の大阪落語資料にみる罵りの助動詞について」 『現象と秩序』 14: 45-63.
- 矢島正浩, 2007, 『近代関西言語における条件表現の変遷原理に関する研究』 (平成 17 年度～平成 18 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) 研究成果報告書) .
- 矢野準, 1976, 「近世後期京坂語に関する一考察——洒落本用語の写実性」 『国語学』 107: 16-33.





\*\*\*\*\*

【編集後記】

『現象と秩序』第17号をお届けします。今号も刺激的な5本の論考が掲載されています。

第1論文は、「孤独死」の当事者についての考察から「当事者/宣言」を分析的な概念として再構成することを試みた意欲的な論考です。カテゴリーをめぐる問題の帰属先としての「当事者」、「問題」を可視化させるメカニズムとしての「宣言」というとらえ方は、当事者宣言の地平をさらに広げることが期待できます。

第2論文は、本誌16号掲載「上方洒落本における罵りの助動詞」の続編です。前号では江戸板から上方板へ改作された洒落本が、今号では上方板から江戸板へ改作された洒落本が検討されています。「江戸ふう」「上方ふう」の罵り言葉とはどんなものでしょうか。

第3論文は、本誌14号掲載「明治・大正期の大阪落語資料にみる罵りの助動詞について」で行われた考察を、新たに昭和初期の資料を加えて検証し直したものです。大阪方言における上向き/下向き待遇の助動詞の、強さと出現頻度の関係性について分析されています。

第4論文は、AI（人工知能）を扱った論文です。AIという新しい仲間を我々はどうのようにして「人間世界」に取り込もうとしているのでしょうか。AIの挙動を人間世界での有意味な挙動として読み取ろうとする、共同的な知的作業が発見されています。

実践報告「社会学者、ブレインアタックに遭遇」は、コロナ禍に脳内出血に見舞われた社会学者・櫻井芳生氏の、発症から現在の療養までの様子をご家族に綴っていただいたものです。遺伝子社会学を研究していた彼が今をどのように生きているか、ご家族がどのように今を受け止め支えているかを、看護師の日記等も交えて豊かに描いています。社会学的感覚は身体的なものとして社会学者に染みついています。その感覚は生を共にしてきた家族にも広がっていくのでしょうか。私自身の家族を見ていてもそう思う、今日この頃です。(H.Y.)

\*\*\*\*\*

『現象と秩序』編集委員会（2022年度）

編集委員会委員長：堀田裕子（摂南大学）

編集委員：樫田美雄（神戸市看護大学）、中塚朋子（就実大学）

編集幹事：川上陵哉（神戸市外国語大学）

編集協力・印刷協力：村中淑子（桃山学院大学）

『現象と秩序』第17号

2022年 10月31日発行

発行所 〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 樫田研究室 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074 (樫田研), e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848

ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>